

3-11. 特定非営利活動法人三保の松原・羽衣村（静岡県静岡市）

(1) 地域の概要

【人口】

7,000 人三保半島内

【地勢】

駿河湾に突き出た砂洲。今は半島であり内側に清水港を抱える。

【面積】

265.54 km² ※平成 23 年 2 月 1 日現在（清水区）

（うち旧蒲原町の区域 14.69 km²、旧由比町の区域 23.06 km²）

【気候、自然】

温暖で雪はまったく降らない。見ることが出来るのは富士の雪だけである。

【歴史】

古代白村江の戦いで有名な廬原氏はここから船を作り出港している。東西の境に位置し、要衝であり、権力者が攻防を繰り返す。江戸時代は長く直轄地であり徳川家康の印象が強いが、その前は今川文化の華開いた場所である。

【観光】

日本平、久能山東照宮、登呂遺跡 東海大学海洋博物館、次郎長史跡、エスパルスドリームプラザ、羽衣の松

【地域資源の概要】

温泉地ではないが、知名度の高い歴史のある観光地がコンパクトに点在しており、東京・名古屋などの首都圏から近いため行楽客はもちろん古くから修学旅行のメッカでもあった。近年はこれにサッカーを中心としたスポーツ合宿も付加されるようになった。東西の中程にあり、地の利も高い。有名な史跡が多く、自ら宣伝の必要がないため、あるがままに今日までに至った観光地でもある。

半分が工業立地でもあるせいか町全体が文化に疎く地域の文化が地域に啓蒙できていない情けない状況にあったが、三保松原の富士山世界文化遺産登録、東照宮の国宝指定、さらに、興津清見寺は世界記憶遺産の申請にあり、この地区の歴史ある観光地の地域に根付いた復興に繋がることを期待している。また、清水港は三保半島に抱かれた天然の良港として発展を遂げているが、登録後には海外からの客船が倍増した。いままでのようにあるがままのもてなしではなく富士山世界文化遺産の三保の松原を念頭にクールジャパンを戦略とした観光政策が求められているが、そこまで真剣に考える人はまだわずかである。この機会を逃したら、この地区が生まれ変わるチャンスはない。特に三保の松原は観光資源が自然資産そのものである。観光力を生かしながらこの自然環境を維持し後世に伝え

るためには、新しい市の都市設計の一環として観光を位置づけ観光政策を作り実践する他はない。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) アドバイザー派遣申請の背景

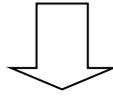
三保の松原は富士山世界文化遺産の構成資産として登録されるまで、国指定名勝、県立自然公園の指定をうけながら、森林計画もなく、薬剤散布をするだけで荒れるに任せられていたというのが実態で、世界文化遺産に向けた取組も静岡市にはなかった。遅ればせながらとはいえ、今、必死に世界文化遺産に向けた取組がスタートした。しかし全体像の見える構想はなく、迷走状態の印象は拭えない。登録から1年半。世界文化遺産登録のお祭り騒ぎに翻弄されながら、これからの展望と指針、方策を模索している。しかし渦中にいると本質がわからなくなり不安も大きい。大きな指針の必要性を感じていたが、どこから整理したらよいかかわからず、苦しんできた。もう一度原点にもどり足元を見つめ客観的なご意見を聞かせていただき、今後に生かしたい。

2) これまでの取組

- ①松葉掻きと草取りの整備ボランティア活動 5年目
- ②松葉堆肥の研究 静岡大学農学部 平成26年度
- ③三保の松原美の世界の出版 三保の松原 文学散歩 絵画、文学の総括
文化芸術の啓蒙
- ④能羽衣ワークショップ 語り「羽衣」 清見寺琉球駿河羽衣交流会
- ⑤現代音楽公演など舞台芸術の企画
- ⑥松葉ペレット 青松葉の研究に対する協力
- ⑦行政に対する景観再生に対する要請活動
- ⑧富士山世界文化遺産への取組を評価していただき静岡県知事より表彰を受けました。

環境、文化にわたる 上記のような内容を平成15年より積み重ねてきました。静岡県はもとより市とのスクラムも綿密になっています。先生から新たな知見をいただき方向性を練り、未来に向けた構想プランを綿密に構築し、共通認識を持つことにより、人間の絆をより強固なものにしていきたいと考えます。そして、世界に恥ずかしくない日本の顔となる観光地を築き上げたいと考えます。

そこで羽衣村は、今までの実績を踏まえ羽衣ルネッサンス構想を提示しています。(議事録にもあるので重なります。)



羽衣ルネッサンス構想

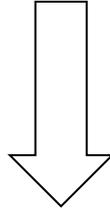
- ① **三保の松原現代の理想郷づくり** 三保の松原と共生したくらし
(環境整備と人間との共生)
- ・ 松と枯れ松葉の関係 → 富栄養化、戦前の循環システム
 - ・ 松葉掻き作業 → ボランティア活動の増員、廃棄物として処分方法
 - ・ 有効活用の検討 → ペレット化、たい肥化、粉末松葉
 - ・ 三保の農産物への活用 → 折戸ナス、トマト、枝豆、メロンなど
- ⇒ 一連の作業を体験し、それが松原再生に繋がるというエコツーリズムへ
(松葉掻き 集荷 粉碎 ペレット化 ⇒ 調理 ボイラー 発電)
環境学習 三保の松原学の研修
- ⇒ 整備の内容を反映した名物、物産を購入することで松原再生につなげる

新たな観光の在り方の構築

- ② **三保の松原美の再生** 三保松原の文化芸術の復興とその源泉となる景
観の再生 (芸術と自然の美の復活)
- ・ 眺める三保松原 → 砂洲の美 和歌や絵画、ビュースポット(日本平、江尻宿、清見寺)、貝島御殿
 - ・ 内海側の現状 → 工業地帯、折戸湾
 - ・ 三保松原の今昔 → 戦前の絵葉書
- ⇒ 対岸からの三保の松原の美の再生を図り、東海道随一と呼ばれた三保の松原の景観のスケールを現代によみがえさせ、世界遺産に相応しい町づくりを図る。日本人の理想郷としての復活、対岸から鳥瞰、俯瞰、ランドマークとしての三保の松原に認識を取り戻す。
- ③ **羽衣観光圏の確立 富士参詣曼荼羅を辿る** 行政区にこだわらない羽衣観光圏の構築
- ・ 曼荼羅に描かれた世界観を実見する (聖地としての認識)
 - ・ 対岸からの眺望地・ランドスケープとしての三保の松原の再認識
(眺望の景物)
- ⇒ 旅に対するロマンや神聖なものへの憧れを創出 ビジット ジャパンへの対応

地域づくりの再生と新たな創出

地域全体が三保の松原という資源景観と共生する社会の構築



地域全体とは 住民や観光事業者だけでなく、企業 工業 学校施設 農業 漁業などすべての人々が一体となって三保松原という自然資産を生かす。

(3) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 26 年 11 月 26 日 (水) ~27 日 (木) 平成 27 年 1 月 15 日 (木)
場 所	静岡県静岡市清水区三保を中心に日本平 果樹試験場、竜華寺、清水港、三保の松原、東海大学海洋科学博物館、興津清見寺、由比、蒲原、五十嵐邸
ア ド バ イ ザ ー	東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授 下村 彰男 氏
参 加 者	【1 回目】 静岡市職員、NPO 法人三保の松原・羽衣村他合計 12 名 【2 回目】 静岡市職員、NPO 法人三保の松原・羽衣村、農業高校他合計 30 名
スケジュール・方法	◆ 1 回目 【1 日目】 ・視察：日本平、竜華寺、果樹試験場、清水港周遊 ・三保の松原保全について説明 【2 日目】 ・松葉ペレットについて説明 ・体験教育旅行・松葉掻きなどについて説明 ・視察： ◆ 2 回目 ・下村先生発表 ・農業高校生発表等 ・意見交換、今後の方針について

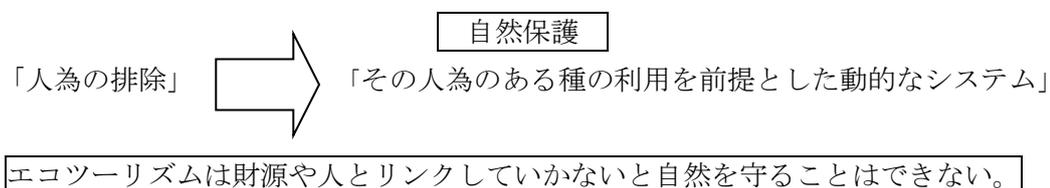
(4) アドバイスの内容

1) 下村彰男先生による視察発表

①エコツーリズムとは

「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境が提供され、

地域の自然と文化の保護、地域経済に貢献することを目的とした旅行形態。」
地域への負担が小さく、来訪者に豊かな観光体験、地域に対する理解を提供し、
地域住民の地域への帰属意識を高め、経済面での+をもたらす。



旅→他日、他火
違う場所で違う文化に触れることこそが旅の本質である。
見るだけから見ているものが地域にどのような影響を与えているのかを知る観光へ
地域づくりに来訪者もかかわってもらおう
交流自立型まちづくり、地域ならではの資源とは何かを考えていく必要がある。
地域の文化的アイデンティティが喪失

「自然資産区域における自然環境の保全および持続可能な利用の推進に関する法律」
守るべき自然環境がある場合に、自治体がどういう使い方をするかはつきり決めれば、入域料金を取れる。資金管理のあり方を上手に活用することが重要。

環境負荷に対する知見と対策、

情報と物と一体となった資源を見出すことが課題

②地域の個性とは

2004年に文化財保護法が改正され、景観が文化的なものとして捉えられる。
日本の国土の7割は人とかかっている。自然が文化として受け継がれている。

②三保の地域資源とは

住民で共有すべきこと。来訪者に伝えたいこと。「三保の宝」は何か参加型のプログラム 複数の点的要素をつなぎ合わせる物語づくりが大事になってくる。

するとキーになるのはやはり松

大きな課題が存在

松林は人間が手を入れ続けられない限り、だめになってしまう。

松葉の除去の担い手をどうするか？

また松と富士の風景は時代とともに変わってきている。こういう点もひとつのストーリーとして提案できる。例えば右松、左富士。いまでは三保の松原から望む

富士は左に松で右に富士という点しかないが、かつては三保半島のさまざまな場所から富士を眺めることができたため、右松、左富士という眺望もあった。この眺めを回復するなどし、松+富士のさまざまな風景を楽しめる視点選定する。

貝島、興津など、かつて富士を眺める名所であったが、工業地帯になってしまっているような場所を今後どのようにしていくのか、早めにプランを策定しておくことも重要。

松富士10景などを選定してみるとどうだろうか。

清水の港湾は景観保護という名目で、青く塗られている場所があるが、自然と調和する色とは低明度、低彩度が原則である。以下下村先生のパワーポイントより

(2) 同化型景観調和: 検討指標(色彩)

自然地における建物屋根の
カラーシミュレーション例

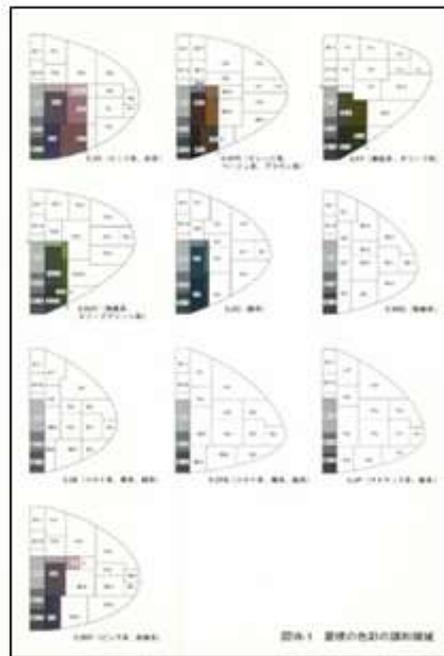
麻生恵(1995)



(2) 同化型景観調和: 検討指標(色彩)

- ・自然風景地における人工構造物の色彩調和に関しては、低明度、低彩度が原則である。(金属物は、+低輝度)

麻生恵(1995)



また、三保の松原の松の持っている神聖的な側面、防災的な側面をそれによって守られていた清水の港湾を一体として考えるとストーリーが作りやすい。

- ・園芸農業が盛んであったことや、牡蠣や海苔と関連付けることができるのではないかと。エコツーリズムの継続にはこういった仕組みのプランニングが決定的に重要。
- ・自主財源をどう確保するか、またいまだけをどうするのかを考えるのではなく、時間経過を考慮したプランを作っていく必要がある。

2) 生徒さん達の発表「松葉を利用した木質バイオマスガス化発電について」

木質バイオマス化発電が可能になれば自然廃棄物、流木、廃材などすべてがエネルギー源となる。

3) 意見交換

●質問者

- ・三保の松原が世界遺産の構成資産に選ばれたということを至宝であることを理解してない人が結構いる。その認識を持たなければと思う。
- ・テトラポッドの問題、海岸の保護をどうするか？
- ・台風による流木の問題をどうするか？
- ・流木を使ったアートをやりたい

●下村 テトラポッドは土砂の供給がないときの対応策。

L字突堤で押さえていくのが現在は一番現実的。

京都の桂川では河床を下げてようとしたが、河川沿いの歩道を広めを取って親水形にしたほうがよいのでは、などさまざまな意見が噴出している。全国的に河川計画を見直す必要がある。

流木もどこかで知らないまま処理されるということではなく、問題として捉えるように芸術的に扱うことも意味がある。

●行政 流木は処理するお金がないというのが実態。

一回の台風でやると、きりが無い。意外と草が多い。

波消しブロックを沿岸突堤にしている。なんとか守っている。今後景観に影響しないような形に進めていく。

●下村

・湯布院の景観について。農家への補助への協力を求めてみると、賛成8割。お金をそういったところからもらえるという時代になってきている。これから資源管理にとってはこういった視点が必要なのでは。が、行政のお金が一番確実なものである。

●文化財課

ヨーロッパと日本における景観に対する意識の違いはどこから生まれるのか。右松左富士のアドバンテージとは。

●下村先生

・帰属意識には歴史がとても重要。昔の人たちは違う風景を見てきたんだよ。ということを知るのも歴史。近代の発展の過程で富士の見え方が変わってきた。清水がどう変容してきたのかを知るための方策としての、右松、左富士。

風景というのは意識するものではない。日常では見ているものは風景ではない。という考え方が支配的。日本の場合は順応性が高く歴史を意識しない。ストックされているものに対する関心が薄い。

・いろんな分野、世代の人間が集まって今日のような意思疎通できる場を上手に作ってもらえればよい。

全体構想があれば、旅行業法の緩和ができると思われる。

うまく制度を活用してもらい、話が出来る場所を担保してもらえれば。

三保そのもの、松そのものはある程度問題なく進む。むしろ旧清水など他のエリアとの結びつきを今後どうしていくかが課題になってくるのではないかと。

一体化させたほうが大きな動きができる。そのつなぎの部分を経史的な面や地理的なつながりから作り出していくことで、大きなテーマになっていく。

航空写真は常に見て意識できるような地図の作り方ひとつにも活かしていくなど、ストーリー、ビジョンを持って動いていくことが肝心。

4) 静岡県立農業高校生徒さんによる「青松葉の研究」

青松葉は抗酸化作用が高く人間にとって有益な食品でもある。ケルセチンが豊富、枯れ松葉についても効能は落ちない。また、お茶と混ぜるともっと効果が高まる。農薬散布などの問題もクリアーできる。

5) NPO法人三保の松原・羽衣村提案事項* 今後の方針について



戦前の三保の絵葉書から現在と観点の違いがあることに着目

三保の松原から見た富士の美だけではないスケールの大きさがかつてはある。

①内海の美

② 洲崎の美しさ 富士との対比



工業地帯

真崎が唯一生き残るが見るポイントがない。貝島からは見えるが今は工業地帯

③対岸からの美 興津 龍華寺 日本平 工業地帯が立ちただかり絵にならない。

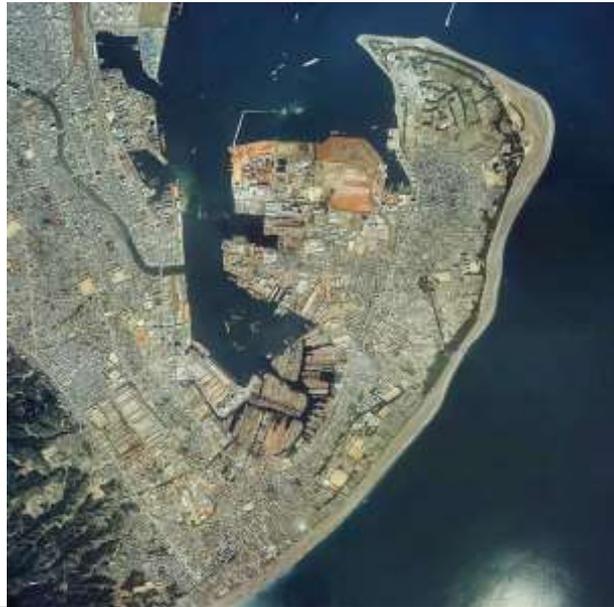
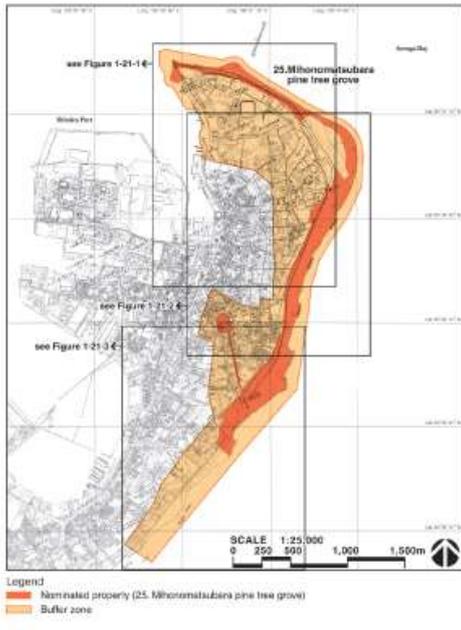
かつての三保の美とは、現地からの景色だけでなく三保の形そのものも入る



工業化の中で消滅させてしまった。

三保の松原は富士山とも一体だが清水港とも一体

ところが構成資産の指定区域に入っていないことで、三保松原への配慮はない。しかし貝島だけでも三保の松原に調和した緑地再生が叶えば三保松原への雰囲気づくりが大きく変わり三保の松原という歴史のある文化景観のスケールを復活させることが出来る。



オレンジ部分が構成資産の範囲

茶色の部分が貝島 埋立部分



江戸時代に描かれた図版

羽衣ルネツツサンス構想について

地域の宝を共通認識するための構想のたたき台をつくった。三保の松原の美の歴史を辿れば、現在のように三保の松原からだけの景観を見るのではなく、広く清水地区の美としてイメージする必要があることがわかる。また、三保の松原へ入る導入部としての雰囲気づくりも大きく関係する。かつてのあるべき姿をすべて復元することは難しいがポイントを清水八景「三保のある景色」などとしてピンポイントで設定することは可能である。もともと、三保半島の内海は貝島御殿や最勝閣があり、興津とつないだ清見瀨の景色として歴史的な景観である。少し配慮するだけで

驚くほどの美が復活する。工業地帯となってしまったが、あきらめずに貝島の臨海部を利用するだけでも大きな再生になる。美の再生は富士山世界文化遺産に相応しい工業地区の再構築を必ず促すはずである。できることから進めていきたい。

6) 下村先生からの最終コメント

東海大学 農高の発表すばらしかった。今後こういう機会をたくさん持って共通の視点と問題意識を共有して課題に取り組んでいくことが肝要。ただし、港に関する部分については大きなプロジェクトが出る可能性が高いので、早いうちに手を打つことが大事である。

***エコツーリズムを念頭に置いた今後の方針について**

羽衣村では週2回の定期的な整備活動を行い5年間目に入っている。地域住民 企業 学校関係者 老人クラブと参加者も多岐に渡る。特質すべきは北海道からの修学旅行生である。今後はこのような活動をエコツーリズムとしてさらに強固なものとし、廃棄物の有効利用を促すために以下のようなメニューを加えたい。

- 1 松葉ペレット製造機導入により、現地でのペレット化を実現し現地で松葉を廃棄物から燃料に変身させる。ストックが可能となる。
- 2 ペレット調理器具の導入により、整備活動のお礼に何等かの名物を提供する。パイ、ピザのようなもの。試供品として整備の参加者へ差し上げる。
- 3 整備参加者に上記の作業にも参加してもらい、(ペレット製造、菓子づくり) 整備を楽しいレジャーの領域に引っ張る
- 4 青松葉の食品化を実現する。
- 5 これらの整備活動を羽衣観光圏内でPRしてもらう。
- 6 三保に相応しい物産や名物を創出する。売店でも販売し整備の基金として積上げる。
- 7 羽衣ルネッツサンス構想を地域の人に啓蒙し、三保松原を広域に発想できるよう意識の転換を図る。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

三保の会議はたくさんありますが、勉強会の形をとることによって、建設的な意見も出て、非常に充実感のある会となりました。このようなことを重ねながら、ベクトルを同じ向きにし、難題に取り組んでいこうと考えています。

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた。

たくさん事例を参考に三保にあったメニューを組み立てることが肝要。

②今まで課題としていたことがより明確になった

問題点が洗い出されたと考えます。

2) 今後期待される効果

エコツーリズムの共通認識ができ、戦略を考えたツーリズムの提案ができれば自
ずと観光地としての資質も上がるでしょう。

羽衣ルネッサンスの構想を啓蒙し理解者を増やす。

3) 今後の取組

羽衣ルネッサンス構想の推進

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

文化的景観の考え方や今後、環境税などを徴収する仕組みなど、これからの環境
保護に対する新しい考え方。

2) その他感想

関係各署の集まりはありますが、形式的になり、物事が進みません。同じ課題を
話し合い知恵を集めれば縦割りの中でも出来ることは多いと思いました。



下村先生発表



「松葉を利用した木質バイオマス
ガス化発電」について発表



「青松葉の研究」について発表

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授 下村 彰男 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

- ・「三保松原」は、世界文化遺産の構成資産として登録されたものの、松枯れをはじめ活性度の低下が問題視されている。申請者であるNPO法人三保の松原・羽衣村は、松原の保全を目的として、松葉の除去や草取り等の林床管理、松の補植、松枯れ木に対する対応等を、行政とも連絡を取りながら実施している。
- ・特に、松葉の除去には力を入れて取り組んでおり、除去作業を進めながら、バイオマス利用をはじめとする除去松葉の活用方法について、地域と連携をとりながら試験的な取組をも進めている。

②課題

- ・松葉の除去をはじめとする松原の林床管理の担い手が必要であり、地域住民の協力や交流人口を活用した仕組みづくりを検討する必要がある。
- ・また、除去した松葉の利活用についても、新たな方策の開発とともに、実際に有効利用していく仕組みを地域や来訪者を組み込んだ枠組みの中で検討する必要がある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- ・松（原）

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ・世界文化遺産の構成資産として三保を代表する存在であるとともに、三保を取り巻く地域の自然的、歴史・文化的諸資源を結びつける存在としての可能性も高い。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・エコツーリズムの考え方や概念について
- ・エコツーリズムを進めることに意義について（まちづくりとの関連）
- ・地域の資源、地域の個性について
- ・三保（清水）地域における「地域資源」の可能性について

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

- ・申請団体であるNPO法人三保の松原・羽衣村が「羽衣ルネッサンス構想」と名付けた「構想」を提示している。しかしながら、目指すべき理念を提示してい

るものの、後は断片的な具体的取組について、現状を中心に列記したものとなっており、空間的側面、事業的（ソフト）側面に関して系統的に検討したものになっていない。

- ・静岡市も、「三保松原保全活用計画」「名勝三保松原保存管理計画」「静岡市景観計画」など部署に応じて関連する計画を策定し観光側面についても言及しているものの、まとまった動きにはなっていない。

②全体構想への意向について

- ・個別の動きを超えて、協議会を設定し全体構想立案に向けて動くまでには、時間と契機が必要であると考えられる。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

- ・中心となって推進していく組織が、構想や計画という概念に対して理解を深める必要がある。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

- ・「松（原）」は、三保のみならず、清水（港）や興津、日本平等を含んだ、地域の自然的、地理的、歴史的、文化的側面を語る上で、核としての役割を果たすことができ、地域の重要な資源と位置づけることができる。
- ・したがって、松（原）の保全を、その問題だけに止めず、その形成や変遷の過程をも含めた「地域の物語」として、地域に点在する諸資源を結びつける必要がある。例えば、
 - ・安倍川や日本平を含む広域での三保の地理的、自然的位置づけ
 - ・富士山との関係や人々の歴史的な営みをも含めて歴史的、文化的な枠組みでの三保や松原の位置づけ
 - ・三保等における農業（園芸）の展開と防風・防潮機能との関係 等々
- ・こうした地域ならではの物語の設定が、地域コミュニティの拠り所や来訪者（観光客）の魅力となって、松（原）の持続的な保全管理に対する理解の促進や、支援活動への参加に結びつくと考えられる。
- ・絵画等に描かれている松（原）と富士山との位置関係は地域の近代化、都市化の過程と深く関わっており、現在では構図が限られたものとなってしまっている（左松右富士）。松と富士山との多様な構図の回復・発見と、視点場の選定・整備も展開の手がかりになるのではないか。
- ・現在、清水（港）と三保（松原）とは別々の存在として、その収まりや発展が独自に計画されており、両者の関係についての調整は十分に検討されているとは言いがたい。しかしながら清水および三保の進展は一体的なものであり、土地利用や景観（色彩等）についても両者を一体的に計画していくことが、地域理解の促進にとっても重要である。

- 折戸湾に隣接する弁天崎や貝島を視点場とする右松左富士の風景・景観の回復を含む、内湾の水際線におけるパブリックアクセスの確保は、三保と清水を結びつける上で大変重要な課題であると考えられる。近代において、このエリアに立地した工場等にも移転等の動きが出ているようであり、そうした動きに際して少しでも水際線へのパブリックアクセスが回復確保できるよう総合的に計画を進めることが重要であると考えられる。
- その他、計画づくりに向けて、専門家である計画系のコンサルタント等と接触し、計画を依頼したり、アドバイスを受けた方がよいと考えられる。その際、この地域についてよく知っている専門家であることが望ましい。